

赤谷の森だより



赤谷プロジェクト地域協議会
財団法人日本自然保護協会
赤谷森林環境保全ふれあいセンター

第11号



コラム*赤谷の森から

持続的な地域づくりに取り組んでいます

赤谷プロジェクト地域協議会

林 泉



昨年秋に行われた「環境教育・関東ミーティング」での観光カリスマ山田桂一郎さんの言葉は、「持続的な地域づくり」を考える上で一つのヒントを与えてくれました。

日本よりもいち早く過疎化や高齢化が進んだスイスの山村では、地域にある自然を活かして、観光で地域を活性化することが選択され、その結果、世界的な観光地としての地位を確立したという内容だったと記憶しています。確かに日本とは諸事情が異なるものの、このみなかみ町も今まさに過疎化と高齢化に直面しています。このままでは将来に希望さえ持てなくなるかもしれない。それではどうかあればいいのでしょうか。いくつかある答えの一つとして、この町も自然環境をはじめとする様々な地域資源を活かして、主に観光産業を活性化させることで地域経済を維持していくことです。

「持続的な地域づくり」とは、ある程度の経済的な裏付けのもと、この社会を維持していくことにほかなりません。私たちが進める赤谷

プロジェクトは、この地域が有する自然を調べることで、地域内にある様々なすばらしい地域資源を再確認し、さらにこれらを地域外の人々にも知らせて実際に見てもらうような仕組みづくりを行っています。いわゆる「エコツーリズム」を確立させたいと考えています。当然、これまでのようなマスツーリズムによる消耗型の観光地を作るつもりはありません。自然環境に配慮し、地域の自然に負荷をかけないようなやり方を模索しています。

みなかみ町では、議会が「環境力」宣言を行い、また、歴史を活かしたまちづくり事業も進められています。私たちはこれらと協調し、共に協力することでよりよい持続可能な地域社会づくりに貢献することができると考えています。もしこのような考えに賛同していただけるのであれば、私たちと共にこの赤谷プロジェクトの活動に参画していただき、地域の自然に触れたり、調べたり、さらに訪れる方々にこの地域の持つすばらしさをお伝えしていただきたいと思います。

赤谷プロジェクト紹介

赤谷の森の溪流環境

溪流環境の復元に向けて

河川上流部のことを溪流といいます。

みなさんの中にも溪流釣りを趣味にされたり、ハイキング中に溪流で涼を取ったりされる方もいらっしゃると思います。

また、溪流は本来、様々な動植物が生育しているところといわれています。

赤谷プロジェクトでは、赤谷の森の溪流を「本来の自然な姿」へ復元しようとしています。

赤谷の森は戦前戦後の急激な伐採により、その形態も大きく変わってきました。治山ダムの設置も赤谷の森の歴史の一つです。しかし、現在の赤谷の森は、イヌワシ、クマタカ等の猛禽類が息できる豊かな森林へ変貌しようとしています。赤谷の森の溪流には、災害の予防や災害復旧を目的とした治山ダムが数多く設置されています。これらの治山ダムのほとんどは戦後作られたもので、なかには破損等が進み機能が低下した治山ダムも見られます。また、溪流には治山ダムのほかに、発電・農業・生活用水等の取水施設が設置されています。

現在赤谷プロジェクトでは、溪流環境復元ワークキンググループ（以下、溪流WG）を作り、赤谷地区の茂倉沢にある治山ダムに着目し、森林環境

が改善しつつある赤谷の森で溪流本来の自然な姿を取り戻すため、関東森林管理局が設置している「茂倉沢治山事業施設整備計画検討委員会」と連携し、茂倉沢をモデルに溪流環境の復元に取り組んでいます。



茂倉沢の位置図

茂倉沢の今

モデルとなる茂倉沢には、溪流の荒廃を防ぎ、赤谷川本流との合流地点付近の広河原集落及び発電施設等の保全を目的として、昭和20年代から治山工事が進められ、本流に12基、支流に5基の治山ダムが設置され、既に全壊している治山ダムもあります。赤谷の森の溪流の中でもっとも多く設置されたところです。

この沢には、イワナ、ヤマメ、カジカのほかに、水生昆虫、カエル、小魚を補食するカワネズミ（群馬県の準絶滅危惧種）などが生息しています。

また、治山ダムの堆砂敷にはトチノキ、カツラ、サワグルミ、ヤマハンノキなどが生育し、溪畔林の一部を構成していますが、平成20年8月の豪雨

により、河床や堆砂敷の溪畔林の変化、治山ダムの新たな破損等が発生するなど、日々刻々と環境が変化していることがわかります。



平成20年8月豪雨後の状況



平成19年度の茂倉沢の状況



透水型



遮水型

治山ダムと溪流のはたらき

治山ダムは溪流の安定、山脚（山すそ）の固定等により森林を保全し、山地災害から国民の生命、財産を保全するという目的で作られます。また、河床勾配が緩やかになり、下流域への土砂流出の速度を緩やかにするといった効果もあります。一方で本来の溪流環境の姿を変えてしまっている面もあります。治山ダムには様々な構造のものがありますが、大きく分けると土砂や流木を止め、水を透す（透水型）タイプと土砂と水を止める（遮水型）タイプがあります。いずれも構造物による落差等により溪流の連続性が分断され、魚類等の移動がさまたげられるといった事例があります。

今後の取り組み

赤谷プロジェクトでは、様々な取り組みを通し、その成果を他の地域へ発信することを目指しています。溪流WGの活動もその一つです。溪流WGの最終的な目標は、赤谷の森を豊かにしていく中で、従来の発想にとらわれることなく、本来あるべき溪流の姿を復元させていくことです。今年度予定している茂倉沢に設置している既設2号ダムの部分撤去を含めた改修工事も、上下流の川の流れを復活させることを目的とした今までの治山事業にはない工法であり、全国的にも注目されている事例です。

部分撤去の後は、溪流環境復元と防災機能の両面の変化をモニタリングし、科学的に検証しつつ必要となる技術開発を進め、その成果が他の地域の溪流環境復元のモデルになることが、赤谷プロジェクトの最終目標です。



相原 慎二
 関東森林管理局棚倉
 森林管理署次長
 (元赤谷森林環境保全
 ふれあいセンター自
 然再生指導官)



2号ダム治山工事イメージ図

猿ヶ京関所資料館

「上越風土記展」と見て



(財) 日本自然保護協会

藤田 卓

4月と言っても木々の芽もようやくほころび始めたところ、庭のコウヤマキの緑の輝きに心地よさを感じる猿ヶ京関所資料館に行ってきました。今回は、資料館で開催中の特別展「上越風土記展」を見ようと、立ち寄ってみました。

三畳ほどのスペースにとろ狭しと、昭和初期の赤谷の様子を写したセピア色の写真が並び、そこから見えてくる当時の人々の生き生きとした姿や、関所資料館の関守、笛木坦(ひろし)さんのお父様である笛木弥一郎さんが、赤谷の山々を縦横無尽に歩き、婦人会などを組織して植物調査をされていた大先輩であり、また生物だけでなく、



上越風土記展の様子



人々の暮らしについても膨大な記録を残されたところが、展示されていました。

これらの展示品で特に目を引いたのは、小さな葉(しおり)でした。この葉は、3cm×15cmほどの小さなスペースに、サクランボ、オキナグサ、カタクリ、キクザキイチゲなどの草花の押し葉と、カラサアゲハやキベリタテハなどのチョウの標本をセットで貼り付けたもので、約60個の葉が展示されていました。昭和30年代に法師温泉に来るお客さんに、お土産として販売するために作成されたものだそうです。この葉の何に目を惹かれたのか? そのポイントは、昭和30年代に赤谷で作られたものということ。つまり、この葉は、当時の赤谷における蝶や植物の生育状況を記したタイムカプセルともいえる貴重な標本資料であるという点です。



展示された貴重な葉(しおり)

例えば、今回展示されていた約60点の中には、現在の赤谷ではほとんど見ることができないオキナグサやサクランボが含まれていました。これらの種は、日本の里山の草原を代表する植物であり、日本全国の絶滅危惧種にも指定されているほど、現在では希少な植物です。この葉は、これらの植物が昭和30年当時、赤谷周辺に確かに生育していたことを雄弁に物語っているのです。他にも県の天然記念物にも指定されている高山蝶のベニヒカゲなども含まれていて、チョウ類から見ても貴重な資料といえそうです。奥さんの話によると、展示されている葉以外にも100点以上が保管されているとのことでした。今後、これらの資料を紐解くことで、現在の赤谷の森の生き物と比較して、この数十年で、どのような生物が消えてしまったのか(例えば、採草地に生育していた草原性の生物)、逆に残っているのかを、これからの作業で明らかにし、赤谷プロジェクトの中で復元すべき自然のヒントが見つけれられるのではないかと期待しています。



猿ヶ京関所資料館・群馬県利根郡みなかみ町
猿ヶ京温泉1144
TEL...0278-66-1156
開館時間...10:00~17:00
休館日...火・水曜日
入館料...大人500円、小人250円

■赤谷プロジェクトに望むこと

里山と人との関わりの これからを見つめて



京都大学 准教授

深町 加津枝

里山は、地域の自然との関わりからつくられて
いる生活様式や営みのかたち、そしてそのかたち
に即した仕組みの中で形成されてきました。その
仕組みが地域個性を形づくり、地域の文化を表現
するものといえます。それぞれの地域の気候や風
土がもたらす自然環境と地域の人々の生活、生業、
信仰、年中行事などが結びつきながら、地域固有
の文化が形成されてきたのです。そして、人との
関わりの濃淡やその歴史の中で、地域固有の生業
的な特質が維持されるとともに、日本人の心のふ
るさともいえるべき文化的景観が形成されてきま
した。

今日、近代化、都市化、過疎化などにより、里
山をとりまく環境は大きく変化しています。燃料
革命や農業の機械化、大規模かつ画一的な開発の
進行などによって、地域資源と地域住民の生活や
生業との連関が途切れ、伝統的な土地利用のシス
テムは失われつつあります。

里山そのものの消失や質の低下が顕在化し、農
林地の管理放棄や廃棄物の投棄、生物多様性の低
下、環境汚染など、問題は深刻です。地域固有の
景観、そしてその中で伝承されてきた知恵や技術

は、その存在さえ認識されぬまま急速に失われよ
うとしています。管理放棄されている里山は増加
しており、これからの方向性が見いだされな
いまま、時代の流れに翻弄されている地域も多々あり
ます。地域に暮らす人々の生活や生業の中で共有
され、伝承されてきた価値観やそれを支える技術
をいかに活かしていけるか、早急に対応すべき大
きな課題です。



京都府丹後半島での里山整備の様子

1980年代以降、里山など身近な自然に対す
る国民意識が急速に高まってきました。地域固有
の二次的自然である里山には、絶滅危惧種を含む
多様な生物が見られ、文化的、歴史的にも高い価

値が見出されています。開発から里山を保全しよ
うとする活動や、居住地の周囲に残されていた里
山にレクリエーションや環境教育的な要素を折り
込んで積極的に関わろうとする都市住民、NPO
などの活動が各地でみられるようになりました。
里山は、地域環境を形成し、環境教育や社会参加
の場として今日的な役割を担うことが広く認識さ
れてきたといえます。今後の新たな管理主体とし
て期待される市民活動は、里山に対する理解者を
いかに広げていくか、という視点で重要であり、
里山に関わることが人々の生活の豊かさを高め、
さらには新たな社会の仕組みを生み出していく原
動力となる可能性を秘めています。

赤谷プロジェクトでは、「炭焼き・道具作りなど
の森林利用の研究と技術の継承」（仏岩エリア）の
ためのエリアがあります。このエリアでの活動は、
かつての里山と人との関わりを見つめ直しながら、
新たな社会の仕組みを生み出していく試みの第一
歩となるものと期待できます。昨年に赤谷で行わ
れた「環境教育・関東ミーツイング」に参加した
際には、地域文化の伝承や環境教育などの拠点と
なる「いきもの村」などを見学し、活動に関わる人々
のお話を直接うかがうことができました。長い歴
史の中で持続的に保たれてきた人と自然の関係か
ら学ぶべきことが多いです。赤谷における里山の
自然、生活、文化とは何か、様々な立場にある人々
が共に学び合い、知恵や技術を継承するための実
践の積み重ねが、これからの赤谷プロジェクトの
礎になっていくと期待しています。





最近の活動紹介 & 活動のご案内

これまで実施した取組

●新治小学校で授業をしました！



センター職員が撮影された動物の写真説明をしています

前号で紹介しましたが、昨年10月21日、新治小学校6年生の遠足に地域協議会と赤谷センターで環境教育の協力をしました。遠足の場所は、歴史的な遺産が残る旧三国街道で、赤谷センターがセンサーカメラの設置を指導しました。設置したカメラを1ヶ月後に回収したところ、

ホンドテン、ニホンツキ、ノワケマ、ヒヨドリ、カケス、ヒメネズミ、アカネズミが撮影されていました。撮影された写真をもとに、2月12日、新治小学校で森林と野生動物の関係についてセンター職員が授業をしました。児童のみなさんは、地元の森に棲む動物の写真に大変興味を持ったようでした。その他に、赤谷センター田中所長から赤谷プロジェクトの取り組みについて写真を利用して説明をしました。

先生方にも大変好評で、今年度も引き続き環境教育を実施することになっています。

●新治中学校で授業をしました！！

新治中学校1年生69名に対して、3月6日、赤谷センター田中所長が「赤谷プロジェクトの取り組み」について説明しました。地元中学校でも初めての試みです。生徒さんたちは地元での赤谷プロジェクトの取り組みに熱心に聞き入っていました。「地元の自然の豊かさについて感動した」、「将来はサポーターとして調査に参加したい」などの感想がありました。



カメラにクマが映っていました(左下)

今後の予定

●地域協議会では、赤谷の森のムタコ沢で地域の水源を守るための取り組み「ムタコの日」を8月2日に予定しています。詳細については、みなかみ町広報誌等でお知らせしますので、みなさまの参加をお待ちしています。

●赤谷センターでは、主に群馬県内の自然や環境に興味のある方を対象に、「赤谷の森自然散策」を計画しています。

「赤谷の森自然散策」は、「赤谷の森」(旧新治村相俣地区の国有林)を、案内人の解説を聞きながら散策し、楽しみながら森林のしくみや動植物について学ぶことができます。皆様のご参加をお待ちしています。



センター職員が説明しています

新しい人の紹介

4月1日付けの人事異動があり、赤谷プロジェクト担当者、関係者が新しくなりましたので紹介します。

関東森林管理局 指導普及課

企画官(自然再生担当)

岩佐 正行



異動前は、(独)国際協力機構(JICA)の「ラオス国森林管理・住民支援プロジェクト」の派遣専門家として勤務しておりました。今年の2月9日に、ラオスから帰国したばかりです。

2002年4月から2003年8月まで、群馬森林管理署に勤務しておりましたので、若干の土地勘などがありますが、新たな気持ちで、担当の環境教育に取り組みたいと思いますので、関係者の皆さん、よろしく願います。

関東森林管理局

赤谷森林環境保全ふれあいセンター

自然再生指導官 星田 弘之



群馬県高崎市出身の星田です。はじめの職務ですが赤谷の動植物と「友達」になれるように微力ながら精一杯頑張りたいと思います。

担当は、猛禽類関係、地域づくり関係です。

趣味は、映画鑑賞(ジャンルは全て)、ジョギングです。よろしく願います。

利根沼田森林管理署

相模森林事務所

森林官 清水川 一儀



出身地は秋田県です。趣味は、人と楽しくノミニケーション(酒を飲む)です。ここへ来る前は利根沼田森林管理署の花咲森林事務所で森林官をしていましたが、相俣では、全国のみさんの注目を浴びている「赤谷プロジェクト」があり、とても楽しみにしています。よろしく願います。

関東森林管理局

赤谷森林環境保全ふれあいセンター

自然再生指導官 貝沼 牧衛



出身地は新潟県村上市で、前橋に住んでいます。

フィールドワークは好きですので、赤谷での活動を楽しみにしています。

趣味はスポーツ観戦です。担当は、植生管理、渓流環境です。健康に留意してがんばりますのでよろしく願います。

赤谷プロジェクト地域協議会への参加について

赤谷プロジェクトの豊かな地域社会づくりに興味のある方は、最終頁の地域協議会までご連絡ください。みなさまのご参加をお待ちしています。

赤谷の森 自然散策の日程等

募集要項

- 参加資格 小学4年生以上 (小中学生は保護者同伴)
- 参加費 無 料
- 集合場所と時間
 - ①関東森林管理局(前橋市)9時出発
 - ②利根沼田森林管理署(沼田市)9時50分出発
- 終了時間 現地では15時30分の予定
バスで集合場所へ戻ります
- 服装など 森林散策のできる服装(長袖、帽子、スック)・昼食・飲み物・雨具持参

申し込み締め切り

実施日の4日前まで

申し込み・問い合わせ先

赤谷森林環境保全ふれあいセンター
TEL.0278-60-1272

第1回	H21. 5/24 日	場所 小出俣沢流域
テーマ	「赤谷の森の植物・動物」	
第2回	H21. 10/25 日	場所 小出俣沢流域
テーマ	「赤谷の森の森林生態・植物」	
第3回	H22. 2/14 日	場所 いきもの村 他
テーマ	「冬の森林・冬芽の観察・フィールドサイン」	

編集部

だより

赤谷プロジェクトも発足して6年目を迎えます。今後も地元のみなさまへ広報誌を通じて赤谷プロジェクトの取り組みをわかりやすくお伝えしてまいります。みなさまのご支援をよろしく願います。(赤谷の森のツツペ)

